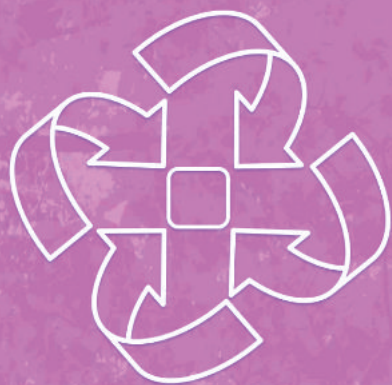


授業研究ハンドブック

# 校内研修改善に向けた 4つの提案



福島県教育センター

## 発刊によせて

よい授業をつくるためには、まず、よい授業とはどのような授業なのかを知ることが必要です。そのためには、「百聞は一見にしかず」と言われるように、よい授業を自分の目で見て、実感することです。

私たち教師は誰もが、児童・生徒の興味・関心を引き付け、魅力ある授業をしたい、児童・生徒に学力をつけさせたいと願っております。そして、教師の授業力を向上させるには、日々の研修が欠かせません。教師の授業力向上には、もちろん、教師個人の日々の努力が必要ですが、学校としての研修体制も大変重要になってきます。

平成25年3月に刊行された『授業改善ハンドブック「新・授業の窓」授業をつくる16の視点』は、思考力・判断力・表現力を育てるための授業づくりの視点について解説したものです。

今回、刊行しました『授業研究ハンドブック 校内研修改善に向けた4つの提案』は、授業力の向上に係る校内研修について、具体的に4つの視点を示し、平成26年度から実践してきたものをまとめ、校内研修システムとして提案するものです。

今、学校の教育力が大きく問われています。教育力を高めるためには、授業力向上が欠かせません。教員一人一人が自分の授業の課題を明確にし、同僚性・協働性を高めながら、研修の日常化を図っていくことが大切です。このような校内研修体制が築かれることにより、学校の教育力が高まっていくものと思います。

本冊子が学校の授業力向上に少しでもご活用いただけるものとなれば幸いです。

平成28年3月

福島県教育センター 所長 渡辺 昇

# 目 次

## ◇ 発刊によせて

はじめに

実態調査から

<b>I 理論編 校内研修の進め方</b> .....	1
校内研修改善の4つの視点 .....	2
提案1  自分の授業における課題を明確にする .....	4
提案2  授業研究を活性化する .....	9
事前研究会 .....	9
研究授業 .....	11
事後研究会 .....	12
提案3  取組を焦点化する .....	18
提案4  取組の日常化を図る .....	20
個人の授業力向上につながる校内研修システム .....	24
授業研究推進に向けて .....	26
<b>II 実践編 校内研修の実際</b> .....	27
T中学校の取組  異教科のチーム内で学び合う研修の例.....	28
S小学校の取組  全体の取組の中で自己課題の明確化を図った例	34
N小学校の取組  チームで取組の日常化を図った例.....	40
◇ 参考・引用文献 .....	46

## □ はじめに

この冊子は、学校において行われる授業研究が、個々の教師の授業力向上に効果的に結び付くように、授業研究の在り方を校内研修の進め方という視点から提案することを目的としています。

福島県教育センター（以下、教育センター）では、授業改善に関する研究成果を踏まえて平成25年に刊行された『授業改善ハンドブック「新・授業の窓」授業をつくる16の視点』（以下、『授業改善ハンドブック』）を活用し、授業力向上に努めてほしいと提案して参りました。個々の教師における努力はもちろんですが、学校全体における研修体制を整え、職員間の同僚性を向上させることにより、授業改善をより効果的に行うことができると考えています。

教育センターでは、「授業力」を『授業改善ハンドブック』の4つの側面に対応させ、「単元構想力」「授業構想力」「授業展開力」「授業評価力」の4つの要素からなるものととらえています。今回刊行する『授業研究ハンドブック』は、『授業改善ハンドブック』の活用を個人で図りながらも、学校全体における校内研修を通して個々の教師の授業力向上を図る1つのシステムを提案したものです。

提案では、具体的な方法を提示しております。学校の実態に照らし合わせて一部を変えて自校化を図るなどして、積極的に取り入れてほしいと思います。

なお、『授業改善ハンドブック』については、教育センターのWebサイトに掲載してありますので、このハンドブックと併せて参考にしていただければ幸いです。

# □ 実態調査から

## 1 調査の概要

(1) 調査内容 ※調査対象 県内すべての公立小学校、中学校、特別支援学校、高等学校  
平成26年6月に、「授業力の向上に係る校内研修に関する調査」を、  
次のような内容で実施しました。

- 授業研究への意欲・課題意識
- 事前研究会・研究授業・事後研究会の実際
- 校内研修における工夫
- 研修主任としての悩み、教諭が授業研究に取り組む上での悩み
- 自分の授業力向上と校内研修との関わり 等

## (2) 調査結果と分析

調査結果を、次のように①～④の4つの観点で分析しました。

### ① 校内研修に対する意欲・課題意識

多くの教師が、意欲や課題意識をもって授業研究に取り組んでいるが、自分が授業者である場合に比べ、自分が授業者でない場合には、意欲と課題意識ともに低くなる傾向が見られた。

### ② 校内研修の実際

「事後研究会の充実」「研究授業の参観方法と事後研究会の工夫」の質問では肯定的回答が多いが、「事前研究会の重視」では否定的回答が多い。研究授業の参観方法や事後研究会のもち方については、改善の必要性を感じていることが分かった。

### ③ 授業研究における悩み

研修主任、教諭ともに時間の確保に悩んでいる。特に研修主任は、校内研修の時間をどのように確保するか、効率的に進めるにはどうすればよいかなどを模索している状況が見られた。

#### ④ 授業力の向上と校内研修との関わり

研究協議の焦点化、効率化を図る必要性を感じている教師が多い。「校内研修を自身の授業力の向上に役立てていたか」「参観者のときに、授業研究での成果や課題を授業力の向上に結び付けていたか」の2つの質問に対しては、他の3つの質問より否定的な回答の割合が高かった。

#### 2 調査結果から見いだされた課題

調査結果の分析から、次の4つの課題が浮き彫りになりました。

##### ① 自己課題の明確化

授業研究会に臨む際に、研究授業の授業者である場合と授業者でない場合の課題意識に差が見られる。

##### ② 授業研究の改善

時間の確保が難しい状況でも、研究授業の授業参観の仕方、事後研究会の持ち方について、各学校で工夫をしているが、改善が必要だとも考えている。

##### ③ 同僚性・協働性の向上

校内研修を日々の授業力向上に結び付けるためには、同僚性・協働性を高めることが大切だと考えている教師が多い。

##### ④ 効率化・日常化の推進

校内研修が、個々の教師における授業力向上に向けた実践の日常化と、効果的に結び付いていない傾向が見られる。

※詳細は、教育センター研究紀要第44集参照

教育センターでは、上記課題に係る解決の一助としてもらうべく、実効ある校内研修の在り方を模索して参りました。校内研修改善の4つの視点から具体的な方策について提案します。学校の実態に応じて、部分的に選択するなどして、積極的にご活用ください。





# I 理論編

校内研修の進め方





## 校内研修改善の4つの視点

校内研修としての授業研究など「授業改善を目的に学校として行われている研究」と「個々の教師の授業力向上に向けた取組」は、どちらも子どもの学力向上をめざす点では共通しており、取組の内容も似ていたり関連していたりする部分が多くあるものです。

前述の実態調査で明らかになった課題を解決するためには、「授業改善を目的に学校として行われている研究」と「個々の教師の授業力向上に向けた取組」を関連付けることが必要です。

学校として協働的に授業研究が行われ、個々の教師がお互いに学び合い、自分の授業実践に生かしていくことの繰り返しによって、学校全体における研究主題に迫り課題を解決することと、個々の教師における授業力向上が一体的に図られていきます。

このような考えに基づき、校内研修改善に向けて次の4つの視点から提案します。

視点1…（自分の授業における）課題の明確化

視点2…授業研究の活性化

視点3…取組の焦点化

視点4…取組の日常化

### 視点1…（自分の授業における）課題の明確化

課題意識をもって授業研究に臨むためには、自分の授業（＝自分の授業力）にどのような課題があるのかが明確になっている必要があります。それを明確にするための具体的な方法を提案します。

## 視点 2…授業研究の活性化

「事前研究会」「研究授業」「事後研究会」という一連の流れの中で、授業研究をより短時間で効率的に行い、かつ、より深まりのある充実した協議にすることが大切です。効率的で充実した協議とするための方法について、基本的なパターンを提案します。

## 視点 3…取組の焦点化

個々の教師は、「事前研究会」「研究授業」「事後研究会」と経験してきたことを、自分の授業改善に役立てたいものです。そのために、一連の経験を振り返り、自分は何を学び、次に何に取り組むべきなのかをはっきりさせておくことが大切です。そのための振り返りの方法を提案します。

## 視点 4…取組の日常化

授業力向上のためには、授業研究から学び合ったことを焦点化し、自分の取組として日常的に実践していくとともに、その有効性を検証したり、改善を図ったりする必要があります。継続して日常的に実践に取り組む方法を提案します。

『授業研究ハンドブック』では、4つの視点に基づいて、個々の教師の授業力向上のために、「授業改善を目的に学校として行われている研究」と「個々の教師の授業力向上に向けた取組」を効果的に結び付けることができる校内研修システムを提案します。そのシステムの機能化を図り、授業改善に向けた実践を継続するために、少人数チームの編成、そして活用を推奨しています。「学校」「チーム」「個人」の取組を連動させ、チームを効果的に活用することで、学校全体の校内研修を通して個々の教師の授業力向上を図ることが大切です。



## 提案1 自分の授業における課題を明確にする

### 1 授業力に関する課題の把握

校内研修においては、個々の教師が授業力の自己課題を把握し、実践を通して授業力を組織的に高めていくことが大切です。その際に、平成25年度に「福島県授業改善研究会」が刊行した『授業改善ハンドブック』に示された授業づくりの16の視点を基に、授業改善や授業力向上に取り組んでいくことが望まれます。

その第一歩として、自分の授業のどこを改善したり、高めたりすればよいのかを明確にする必要があります。一方、研修主任には、個々の教師が授業力の課題を明確にして取り組めるように推進することが求められます。課題が明確に意識されることで、授業の工夫や改善も進めやすくなります。

そこで、自分の授業の評価や分析を基に、授業力向上への具体的な取組の見通しをもつために、次の2つのシートの活用を提案します。

#### 「授業力チェックシート」

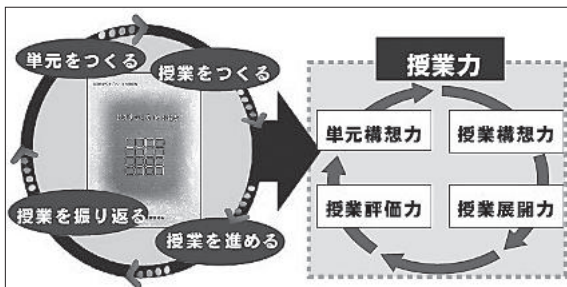
授業力向上をめざした授業づくりに必要となる視点を、『授業改善ハンドブック』を基に48の診断項目にまとめたものです。個々の教師が、日々行っている授業を振り返り、自己診断によって授業力の現状を把握するためのシートです。

#### 「授業力分析シート」

「授業力チェックシート」に記入した、自己診断の結果をレーダーチャートで表すことができるため、授業力の課題を見いだすことができます。その中から、さらに取組の優先順位を設定して焦点化を図り、授業改善に向けた具体的な見通しをもつためのシートです。

## 2 授業力チェックシート

「授業力チェックシート」は、『授業改善ハンドブック』の授業づくりの4つの側面から、「単元構想力」「授業構想力」「授業展開力」「授業評価力」という授業力の4つの要素ごとに、合計48の診断項目を設けています。個々の教師は、研究教科における具体的な指導場面を振り返りながら、5段階の評定尺度から当てはまると思う段階を選択して数値を入力します。



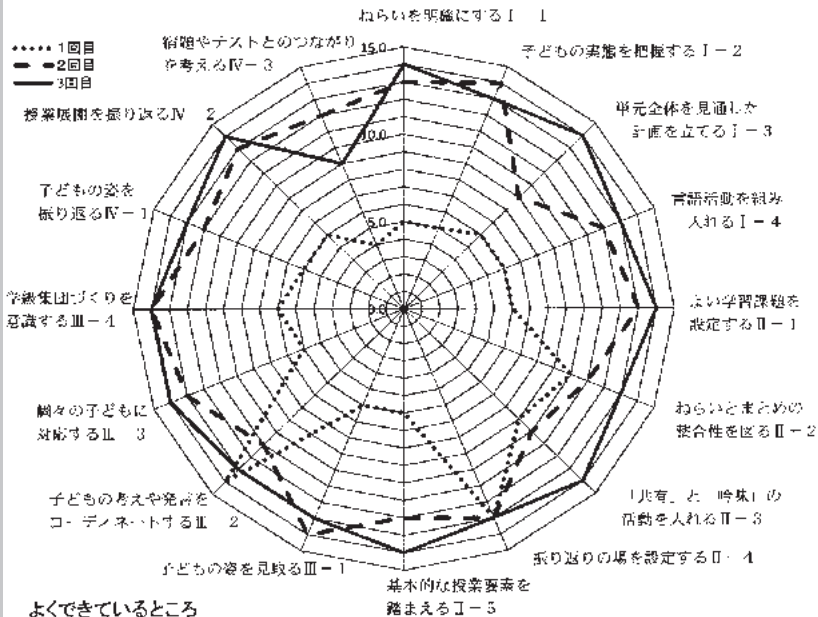
## 3 授業力分析シート

「授業力チェックシート」で、自分の授業力を評価したら、次は「授業力分析シート」でその結果を確認・分析し、校内研修と関連付けた授業力向上に係る自己目標の達成へ向けて、授業実践を積み重ねていくことになります。「授業力分析シート」は、「授業力チェックシート」の診断項目による評価結果をまとめたものです。このシートは、授業づくりの16の視点ごとの集計結果が相対的にレーダーチャートで表示されるので、授業力の自己評価の結果を視覚的に分析しやすくなっています。これを基に、自分の授業力に関して、どんなところに課題があるのかを分析し、授業改善に向けた課題解決の見通しを明確にします。最終的には、課題解決の具体的な手だてを明確にします。その際、『授業改善ハンドブック』を効果的に活用し、授業づくりの具体的なポイントを参考にすることで、課題解決の手だてを導き出すことができます。また、学校の校内研究の視点（仮説、手だて）や学年・教科等のチームで計画した手だてとの関連性や整合性が図られるように、自分の授業改善に向けた手だての設定を工夫することが大切です。

第 回 授業力チェックシート 平成 年 月 日実施

氏名( )

分類	番号	診 断 項 目	1回目	2回目	3回目
I	単元をつくる	初めから教科書や教師用指導書に頼らず、子どもの実態を加味してねらいや活動を考えている。	3	4	4
		身に付けさせたい力は何か、そのためにどのような指導をするのかを意図して、学習内容の配列や時間配分を考えている。	1	5	5
		小中9年間の学習内容の系統性や小中9年間で身に付けさせたい力を踏まえている。	1	4	4
		関連する既習事項の理解度や学習内容への興味・関心の程度を把握している。	2	5	5
		前学年までどのような活動を通してどのように学んできたのかを把握している。	1	5	4
		把握した子どもの実態を、単元構想や授業に生かす工夫をしている。	2	4	5
II	授業をつくる	子どもの思いや願いを生かし、つながりのある追究活動ができるように単元を構成している。	3	4	4
		ねらいの達成に最もふさわしい活動になるように教材研究を行い、教材の本質や特性を踏まえて単元構成を工夫している。	2	3	5
		単元を通して、観点ごとの評価をバランスよく計画的に行うようにしている。	1	2	4
		教科の特質を踏まえた言語活動を位置付けている。	2	4	5
		必然性のある言語活動がなされるよう「読む」「書く」「聞く」「話す」を意識して単元の展開を工夫している。	3	5	4
		「思考・判断・表現」の評価規準は、言語活動と関連付けて設定している。	1	3	5
III	授業を進める	ねらいをもとに、子どもが目的意識や見通しをもつことのできるめあて(課題)を設定している。	1	4	4
		学習課題は教師から与えるのではなく、子どもから引き出した問いをもとに設定するようにしている。	2	5	5
		実物、実演、ICTの活用など学習意欲のわく教材の提示の仕方工夫し、問いを引き出すようにしている。	3	4	4
		本時の学習後の子どもの姿を具体的に想定し、ねらいを明確にしている。	4	5	5
		ねらいをもとに、子どもが目的意識や見通しをもつことのできるめあて(課題)を設定している。	5	3	4
		「何が分かったのか」「何ができるようになったのか」が明確になるまよめ方をさせている。	1	3	5
IV	授業を振り返る	授業の中で何を共有させるか焦点化し、そのことについて一人一人に自分の考えをもたせるように工夫している。	2	5	4
		共有や吟味が効果的に行えるよう、学習形態や話し合いの方法等を工夫している。	3	2	5
		話し合ったことなども子ども自身がもう一度自分で考える活動を設けている。	4	3	4
		子ども自身の表現で本時のまよめを書かせるようにしている。	4	4	5
		何が分かって(できて)、何が分からなかったか(できなかったか)を子ども自身が自覚できるようにしている。	5	5	4
		自己評価、他者評価、相互評価を計画的に取り入れている。	4	4	5
III	授業を進める	事前に板書案を立てるなどして、構造化された板書をしている	3	3	4
		どのような子どもの姿を具現したいのかを明確にして、適切な発問をしている。	2	5	5
		ノートの書き方の約束を決めて、継続的にノート指導を行っている。	1	4	4
		授業中のあらゆる場面で、可能な限り個々の子どもの姿を見取るよう努力している。	1	5	5
		見取ったことを、次の展開に生かすようにしている。	2	4	4
		自分の授業以外でも、子どもの姿を多面的・多角的にとらえる努力をしている。	3	5	5
IV	授業を振り返る	最終的に引き出したい考えや発言を具体化し、明確にしている。	4	4	4
		授業中、子どもの理解度や考えを把握しながら、次の展開を構想している。	5	3	5
		子どもの発言に対し、すぐに教師が説明したり補論付けたりせずに、全体に広げたり、つなげたり、戻したりしている。	5	4	4
		個人差があることを当然と受け止め、実態に応じた指導を心がけている。	3	5	4
		学習速度の速い子、遅い子への支援の方法を考えている。	2	4	5
		特別支援教育の考え方を取り入れ、個に応じた支援を考えている。	1	4	5
IV	授業を振り返る	「間違いは宝、誤答を生かす」という意識をもって授業を進めている。	2	5	4
		親和的な学級をめざし、学習規律を確立したり「他者の大切さ」を意識させたりしている。	3	5	5
		授業中、子どもに対し、ほめたり、認めたりする言葉を多くかけている。	2	4	4
		子どもの発言やつぶやき、表情、ノートへの記述などから、子どもの内容を推察しようとしている。	1	5	5
		子どもの理解度や見方・考え方・感じ方等を把握し、更なる意欲付けや思考の深まりへつなげている。	2	4	4
		座席表や個人カルテ、録音などで子どもの学びの姿をとらえている。	3	3	5
IV	授業を振り返る	自分の授業を振り返る資料を体系的に収集し、授業を振り返っている。	2	4	4
		自分が授業者のときも参観者のときも、授業研究会に主体的に参加している。	1	5	5
		授業研究会以外にも少人数で授業を見合うなど、日常的に授業を振り返るようにしている。	3	4	4
		授業の学びが生きた宿題や学習課題につながる宿題など、授業と宿題のつながりを意識して宿題を出している。	2	3	5
		テストの後、解答の分析を行い授業に生かしている。	1	5	4
		全国学力・学習状況調査や福島県学力テストなど、子どもが受けるテストの問題を解いて、授業づくりに生かしている。	1	4	5



## よくできているところ

## 【記入例】

- 指導事項を明らかにして、授業を構想することができた。
- 子どもたちに身に付けさせたい力を意識し、ねらいを設定することができた。
- ねらいを明確にしたことで、よりよいまとめにつなげることができた。振り返る場を設定したことで、子どもたちの間で思考過程を共有させることができたと考えた。

## 課題となっているところ

## 【記入例】

- 授業が教師の一方的な説明になりがちで、子どもたちの集中力が続かない。
- 『「共有」と『吟味』の活動を入れる』が落ち込んでいる。子どもたちの考えを広げられない。子どもの意見を上手に取り入れて授業を進めることができない。
- 教材研究の仕方に不安がある。また、学習指導案を作ることが苦手である。
- 授業後のテストでは、子どもたちの点数が伸びていない。学習内容の定着が十分ではない。

## 課題解決の見通し

## 【記入例】

- 子どもたちを授業に集中させる手立て。教材研究をして、子どもが興味関心を高めて授業できる工夫をする。
- 教師の一方的な説明にならないような授業の仕方。発問を工夫したり、子どもの考えを広げたりするやり方。
- 1日のうちで、全ての子どもが何らかの発言ができるように、授業を組み立てる。子どもの発言をほめるなど、認めてあげる。
- 上位の子どもへの対応と下位の子どもへの対応を準備して授業に臨む。





## 研修主任のシート活用術

「授業力チェックシート」「授業力分析シート」は、これまで説明してきたことのほかにも、次のことが可能です。

- ① 1枚のシートで3回の分析ができる。
- ② 個人の「授業力のチェックシート」を記入すると、学校全体やチームごとの集計結果を自動で表示することができる。

そこで2枚のシートには、さらにこんな活用の仕方もあります。

例えば、シートから分析した個々の授業力における課題を基に、学校全体の課題を導き出し、研究主題の設定につなげることもできます（実践編P. 30参照）。

また、研究の途中やまとめの時期においても継続的に活用することで、個々の教師が課題解決に向けた取組の修正を行ったり、全体やチーム内で共有化と見直しを図ったりするなど、PDCAサイクルで個々の教師の取組と校内研修を連動させた組織的な実践につなげることができます（実践編P. 37参照）。

「授業力チェックシート」「授業力分析シート」は、福島県教育センターのWebサイトに掲載してあります。以下のURLからダウンロードしてご活用ください。

<http://www.cms-center.gr.fks.ed.jp>





## 提案2 授業研究を活性化する

### 1 事前研究会

事前研究会を2段階で実施します。1段階目（事前研究会1）はチームで行い、「研究授業者の授業づくりをチームで支援する」ことを目的とします。2段階目（事前研究会2）は全教師が参加し、「研究授業者の意図を共有する」ことを目的とします。効率化が求められている中、あえて事前研究会を2回行うのは、共通の視点で授業参観と事後研究会を行えるようにするためです。全教師が参加する事前と事後の授業研究会における時間短縮と協議内容の深まりが期待できます。

#### (1) 事前研究会1：チームによる授業づくり

全体で長時間集まるのは大変ですし、だからといって、個人で指導案を練り上げることはなかなか難しいものです。そこで、授業づくりを少人数のチームで進めることを提案します。少人数だと集まる時間をつくりやすくなりますし、授業者は、授業づくりをチームで行うことで、本時において身に付けさせたい力、教材のとらえ方、学習活動や評価のあり方など、様々な角度から指導案を見直すことができます。

チームによる協議は、3～5人の少人数で行い、時間は放課後や空き時間等、隙間の時間を活用します。研修主任は、チームで協議する時間がとれるようにマネジメントすることが大切です。

協議する内容は、「ねらいは何か」「本時の課題をどうするか」「どのような活動を仕組むか」「子どもの考えをどのようにコーディネートするか」「まとめをどうさせるか」等です。授業者の指導案を検討し、よりよい授業づくりをサポートします。

チームのメンバーは、授業者がどのようなねらいで授業をするのか、



どのような子どもの姿を求めているのかを理解するとともに、授業者の思いや願いを大切にします。

## (2) 事前研究会 2：全教師による授業参観の視点の共有

全教師が参加する事前研究会 2 では、授業者が「授業参観シート」を作成して協議に臨むことで、授業者が求めている子どもの姿が明確になり、より焦点化された協議とすることができます。

授業者は、指導案や「授業参観シート」を基に、「授業のねらい」「求めている子どもの姿」「授業を見る視点」を説明し、質問があれば答えます。授業者の意図を理解し、「授業参観シート」の記入の仕方を確認するために行うものなので、短時間で実施することができます。

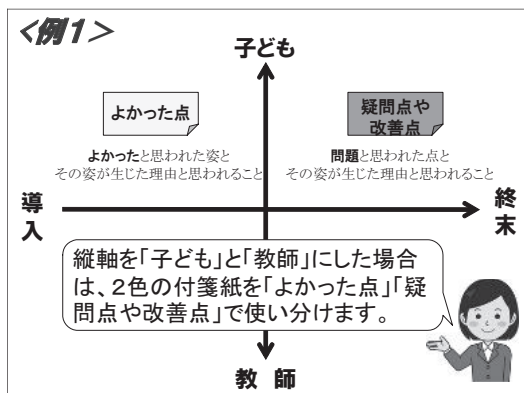
### < 授業参観シートの例 >

授業を見る視点	子どもの学びの様子・教師の支援		課題解決の方法
	よかった点	疑問点(課題)	
①自分の考えをもつことができていたか ・図に線や矢印を書き入れたり、式や言葉で説明を書いたりして、自分の考えをノートに記述することができたか	事前研究会2で共有する視点を記入する。		授業を見て、課題だと思った部分の解決策を書く。
②他との関わりにより、考えを深めることができていたか(多様な方法への気づき) ・自分とは違う考え方をした友だちの図を読み、解決方法を考えて式に表すことができたか ・自分とは違う考え方をした友だちの式を読み、解決方法を考えて図に表すことができたか	子どもの姿 教師の関わり	子どもの姿 教師の関わり	
③わかりやすく伝えることができていたか(多様な方法の説明) ・学び合いを通して多様な考え方を身に付け、はじめにもった自分の考えとは違う考えについて、筋道立てて説明することができたか	参観時には、各視点に基づき、子どもの姿がどうだったかを見取り、よかった点と疑問点(課題)を付箋紙に書く。同時に、見取った子どもに教師がどう関わったのかも付箋紙に書く。		
その他	参観時に、参観者が授業を見る視点以外で気付いたことを書く。		

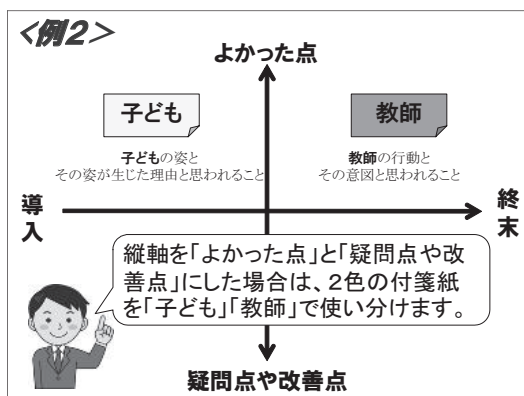
※ 中学校のように、異教科によるチーム編成の場合は、事前研究会 1 で「授業参観シート」を活用することで、授業づくりの視点が明確になり、協議の焦点化を図ることができます。

## 2 研究授業

参観者は授業参観シートを活用し、授業参観の視点に基づいて子どもの姿を見取り、付箋紙に記入します。記入の仕方は、事後研究会の際に行うワークショップの方法や用いるワークシートの種類によって変わります。つまり、「何を」「どんな視点から」分析したいのかということから、授業で何を見るかが決まり、付箋紙に何を書くかも決まるのです。例えば、授業中の子どもの姿を基に、教師の授業力について反省的に協議し、指導と子どもの様子を分析するには、横軸が時系列（授業過程）のワークシートが効果的です。縦軸の取り方や付箋紙の使い方は複数ありますが、ここでは、2つの例を紹介します。



<例1>は、授業者の指導と子どもの反応との関係から、成果や課題がとらえやすくなるワークシートです。授業参観の視点に基づき、成果と課題、改善策について協議したい場合に適しています。



<例2>は、授業中の子どもの姿と授業者の指導を関連付けてとらえることができるワークシートです。指導上効果的であった点や問題点、さらに問題解決の方向性や今後の目標について協議したい場合に適しています。

### 3 事後研究会

#### (1) 事後研究会全体の流れ

事後研究会の進め方と時間配分は、下記を基本とします。指導助言等は特に時間を取らず、管理職等も協議の中で発言します。事後研究会は、効率化（短時間で深めること）が重要で、授業者及び参観者が何を学び、今後はどう生かすかが大事です。指導助言頼みにならず、授業者と参観者の全員で高め合う意識をもつことが授業力向上に有効です。

① 授業者自評	5分
② ワークショップ型協議	30分
③ 共有	5分
④ 振り返り	5分
⑤ 授業者から	5分
＜合計50分＞	

- ① **授業者自評**……事前研究会のときに確認された、めざしたい子どもの姿が実現されたか否かを述べます。実現されたとすれば何が有効だったのか、されなかったとすれば教師の関わり方にどのような問題があったのか、考えを述べます。
- ② **ワークショップ型協議**……管理職も交えて4人程度の班をつくり、参観者が記入した付箋紙をワークシート（P. 11参照）に貼りながら協議を行います。各班には、授業者と同じチームのメンバーが入り、ファシリテーター役を務めます。
- ③ **共有**……1班ずつ、ワークショップ型協議で作成したシートを見せながら協議内容を発表します。
- ④ **振り返り**……参加者全員が、研究授業の参観や事後研究会での協議を通して何を学んだかを、「授業改善シート」を活用して整理します。（詳細は、提案3参照）

- ⑤ 授業者から……事後研究会の協議で何を学んだか、今後どう生かしていくのかを述べます。

◆ 用語解説

<ワークショップ>

ワークショップとは、「共同で何かを作る場所」を意味しており、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で討議したり創作したりする学びや創造のスタイルである。ワークショップでは、参加者が主体的に参加し、積極的に関わっていくことが不可欠で、自らが活動することによって学びを体得し、グループ活動での参加者の共同作業により、相乗的な成果を創り上げることができる。

<ファシリテーター>

人々の活動が容易にできるように支援し、うまくことが運ぶように舵取りをすることをファシリテーションといい、集団による問題解決、アイデア創造、合意形成、教育・学習、変革、自己表現・成長などあらゆる知識創造活動を支援し促進していく働きを意味する。その役割を担う人がファシリテーターであり、ファシリテーターは、中立的な立場でチームのプロセスを管理し、チームワークを引き出し、そのチームの成果が最大となるよう支援する。

<KJ法>

KJ法は、文化人類学者の川喜多<sup>かわき た じろう</sup>二郎氏が発案した収束思考の手法である。様々なデータやアイデアをカードに記入し、それらを共通のものでまとめていき、新たな仮説を発見しようとするもので、問題解決の手法や情報の収集・整理の手法として広く活用されている。

〔「教員研修の手引き2015」(独立行政法人教員研修センター) 参照〕

(2) ワークショップ型協議の進め方

30分という短時間で、できる限り深まりのある協議を行うために、ワ

ークショップ型で協議を進める方法を提案します。ワークショップは、班で協議したり問題解決を図ったりする学びと創造のスタイルであり、参加者の主体的な参加を促すとともに、同僚性・協働性の高まりが期待できます。付箋紙の使い方やワークショップ型協議におけるワークシートのフォーマットには様々な種類があります。ここでは付箋紙を「教師」と「子ども」で色別して記述する方法を、ワークシートは「よかった点」と「疑問点や改善点」を時系列で表すもの（P. 11の〈例2〉参照）を取り上げます。

＜進め方の細案＞ ※班のメンバーがA～Dの4人の場合

1 付箋紙を貼る（10分）

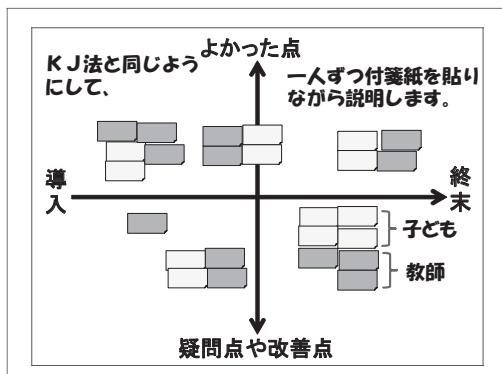
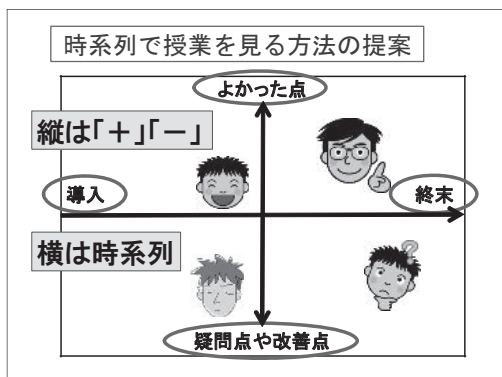
◎ 時系列に沿ってではなく優先度の高いものから付箋紙を貼ります。

1 授業中に書いた付箋紙について、研究主題や当日の授業のねらいから考え、重要と思われるものから優先順位を決めます。

2 付箋紙を貼り、説明します。付箋紙の貼り方及び説明の仕方は、以下のとおりです。

(1) Aが、最重要と思った付箋紙を貼り、見取った事実とその理由と思われることを短時間で説明します。

(2) B, C, Dは、Aが貼ったことと同じ場面（瞬間）について書いている付箋紙



があれば、Aが貼った付箋紙の近くに貼り、簡単に説明します。

(3) 次にBが最重要と思う付箋紙を貼り、説明します。同じ場面について書いた者は、付箋紙を近くに貼り説明します。C、Dについても同様に行います。

(4) 最重要場面についての話が一通り終わったら、優先度2番目の内容が書かれた付箋紙を貼り、(1)～(3)と同様に説明する活動を繰り返していきます。

(5) 優先度の高い順に、10分の中でできるところまで行います。ここまでは、付箋紙を貼った者が書いた内容について説明し、他の者は共感的に聴くようにします。

(6) 10分経ったら、残った付箋紙を全て貼ります。

## ② 構造化し、改善策を検討する（20分）

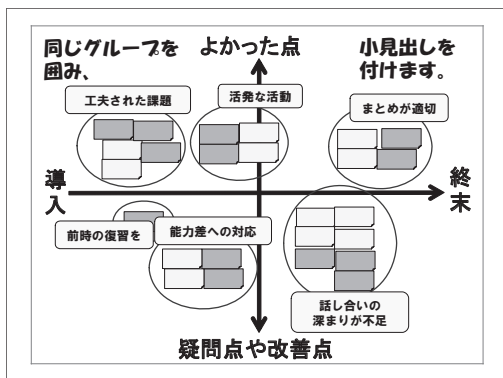
◎ KJ法により構造化し、協議した内容をマジックで書き込みながら改善策を検討します。

1 同じ、または似ている内容の付箋紙について枠で囲み、小見出しを付けながら協議をします。

2 付箋紙を貼る段階で、授業のポイントが絞られてきていると思われるので、重要な部分から話し合います。

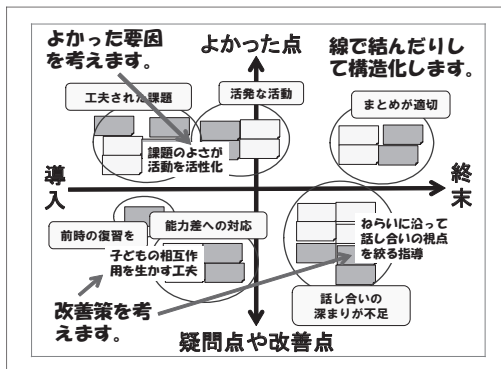
3 必要に応じて、付箋紙

を貼り足したり、マジックで書き込んだりして、話し合ったことがワークシート上に残るようにしながら話し合います。このときは、自由に話してよいのですが、一人の話を30秒以内とします。



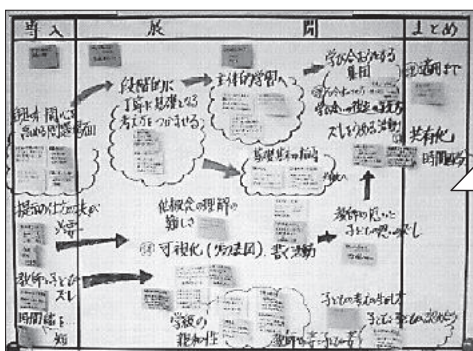
4 よかった点については「よかった要因」を、課題については「改善策」を話し合い、ワークシートに書き込みます。

5 授業の流れに沿ってポイントとなったところを振り返ります。



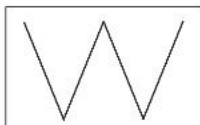
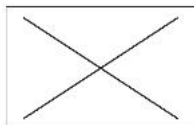
※ 付箋紙の使い方やワークシートのフォーマットは多くの種類があります。協議の目的に応じてワークシートを選びましょう。

<時系列表を用いたシート>

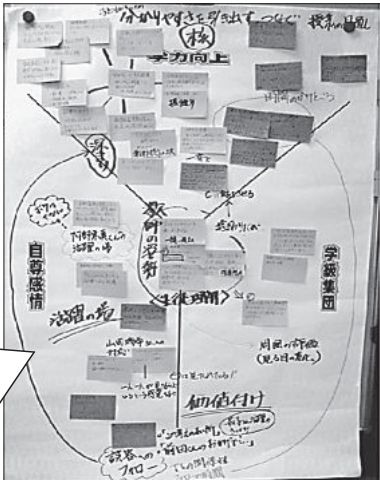


フリーシートのよさを生かした形の時系列シートです。付箋紙のグルーピングや構造化が進めやすいシートです。自由度が高い分、経験を積んでから挑戦したい形です。

Yチャートは、授業者の意図を基に3つの視点を設けて、多面的・多角的に協議する際に適したシートです。視点の数を4つにしたXチャート、5つにしたWチャートもあります。

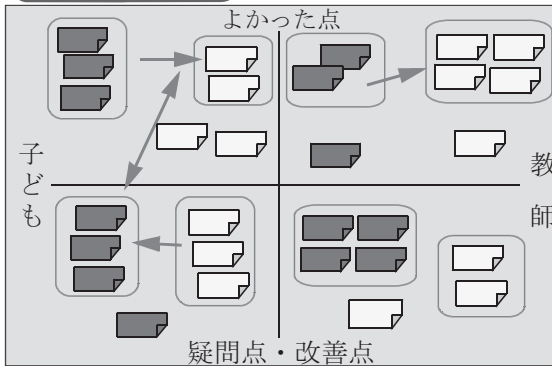


<Yチャートを用いたシート>



ワークシートの選択 ー協議の目的に応じてワークシートを選ぼうー

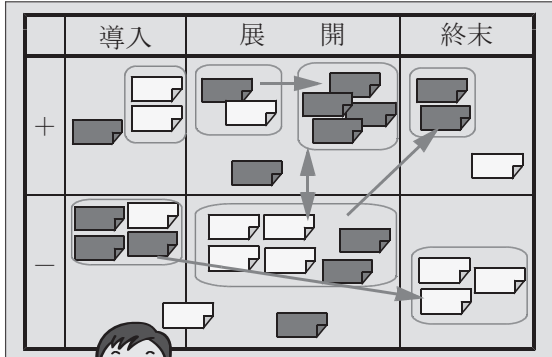
概念化シート



- 縦軸は「成果(よかった点)」と「課題(疑問点・改善点)」
- 横軸は「子ども」と「教師」
- 横軸は、協議の視点とすることも可能

- 【メリット】
- ・教師と子どもなど、2つの側面から成果と課題を出し合うので、関連付けながら改善策を見いだせる。
- 【デメリット】
- ・枠組みに自由度があるので構造化に時間がかかる。

時系列シート



- 縦軸は「成果(+)」と「課題(-)」
- 横軸は、授業の段階(「導入」「展開」「終末」など)

- 【メリット】
- ・教師や子どもの活動に応じて、きめ細かく分析することができる。
  - ・授業の流れに沿って協議できるのでワークショップ型協議に慣れていなくとも参加しやすい。
- 【デメリット】
- ・協議内容が本時に限定されやすい。



時系列シートには横軸に学校の研究主題に迫る視点と関連付けた、個人の授業力に関する課題解決の視点を明記したシートもあります。

このシートは、授業分析の視点がしばらくられ、授業者の授業改善に直結する協議につなげやすいというよさがあります。

	① 導入における課題把握の工夫 ② 教材提示と発問・指示の工夫によって、一人一人の課題意識を高める。	③ 自力解決の場における個に応じた指導の工夫 ④ 発表ボードの活用と発問・指示の工夫によって一人一人の考えを全体に広げる。	⑤ 一人一人の考えを生かした纏り上げの場の工夫 ⑥ 学習の流れの分かる構造的な板書構成に努める。
導入			
展開			
終末			
	① 学校の研究主題に迫るための視点	② 自己課題解決のための視点	





## 提案3 取組を焦点化する

### 1 振り返りによる取組の焦点化

授業研究は授業者だけに限られたものではなく、参観者にとっても学びの場である必要があります。漫然とした協議にしないためにも、個々の教師が課題意識をもって参加し、自身の授業を振り返ることが重要です。

また、個々の教師による振り返りだけでなく、事後研究会終了後、チームごとに話し合いをもつことで、授業改善に向けた共通の視点を確認するなど、取組を焦点化することができます。

### 2 授業改善シート

「授業改善シート」は、授業研究から学んだことや授業改善の具体策を記入するシートで、個々の教師が授業改善に向けて、自分の授業を振り返り、取組を焦点化するためのものです。事後研究会の振り返りの場面（P. 12参照）で、5分程度で記入します。

「授業改善シート」を記入する	「授業改善シート」の記入例
<p>A6の用紙に記入する</p> <p>授業・事後研究会から学んだこと</p> <p>授業改善の実践事項</p> <p>氏名( )</p> <p>具体的に1つだけ書く</p> <p>授業改善の実践事項</p> <p>自分の授業にどう生かすか書く</p>	<p>授業改善シート</p> <p>授業・事後研究会から学んだこと</p> <p>立式はできていても本当に意味が分かっているとは限らない場合があり、確認が必要。</p> <p>授業改善の実践事項</p> <p>一人の子に全てを発表させるのではなく、他の子に説明させることを通して全体の理解を深めさせる。</p> <p>氏名( )</p>

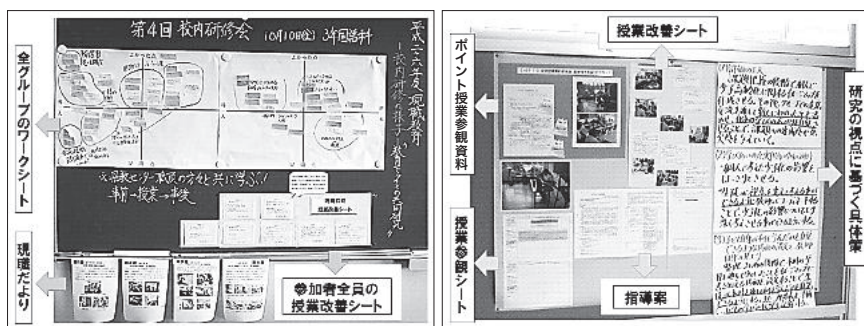
〔「授業力を高める校内研修の進め方」（鹿児島県総合教育センター）参照〕

- ・ A6サイズのシートに、「研究授業や事後研究会から学んだこと」と「授業改善の実践事項」を記入します。
- ・ ポイントを1つだけに絞り、具体的に記入します。

- ・ 「授業改善の実践事項」には、「研究授業や事後研究会から学んだこと」を自分の授業にどう生かすのか、具体的に記入します。

### 3 取組の共有化

学校全体で授業改善への取組を推進するためには、チーム及び学校全体での相互作用を高めることが大切です。相互作用を高めるには、個々の教師が授業改善の具体策をどのようにとらえているのか、事後研究会での班別協議がどのように行われたのかなど、取組を共有することが重要です。例えば、「授業改善シート」に記入した内容を、事後研究会終了後にチーム内で発表し合ったり、現職だより等で紹介したりするなど、1つの方法です。また、「授業改善シート」やワークショップ型協議で作成したワークシート等を、いつでも見られるように掲示するなど工夫も考えられます。このように、取組の共有化を図ることが、学校全体での授業改善の意識や相互作用の高まりにつながります。



- ・ 各班のワークショップ型協議のワークシートや全員の「授業改善シート」を掲示します。
- ・ 各班のワークショップ型協議で出された協議のポイントや、「授業改善シート」の内容を「現職だより」等に掲載します。
- ・ 研究授業やポイント授業観察（P. 22参照）における指導案なども掲示することで、授業づくりの参考にします。



## 提案4 取組の日常化を図る

### 1 チームで行うことの意義について

提案3で焦点化した取組は、チームを効果的に活用しながら継続することが大切であると考えます。取組の日常化をチームで行うことで、時間を確保したり、小まめに動いたりしやすくなるため、「時間がない」「効率化を図る必要がある」という悩みを解消することにつながります。また、一人で行うのではなく、チームで助け合ったり、刺激し合ったりすることが、より深まりのある授業改善の取組に結び付くと思われまます。さらに、心理的にも、チームで行うことによる心強さや安心感が得られ、一体感が高まります。

### 2 チーム編成について

どのようなチーム編成が適切かは、学校種や学校規模、研究教科等によって異なってきます。同教科編成や異教科編成などの教科別、学年・ブロック別編成や研究組織別編成などの組織別、同年齢編成や異年齢編成などの年齢別など、それぞれのチームの利点を考慮し、学校の実態に合わせて編成したり、組み合わせるなど各学校で工夫します。チーム内での相互作用を高めるためには、1年間またはある程度の期間メンバーを固定することが大切です。

	編 成	利 点
教科別	同教科編成	教科の特質について、共通理解が図れていることが前提であるため、教科の目標の達成に向けて専門的な知見から協議することができる。また、授業づくり以外にも、出品作品の検討や特別教室の管理などにも対応することができる。
	異教科編成	文科系、理科系、技能系などに分けたり、言語に関わる教科(国・英)、社会生活に関わる教科(社・技家)、数式や音符など記号を有する教科(数・音)、実験・体験等に関わる教科(理・体・美)などに分けたりすることで、専門を超えて協議することができる。
組織別	学年・ブロック別編成	子どもの実態を把握したり、学習の系統性や発達段階に応じた指導を考えたりに適している。また、学年会との連携も図りやすく、同僚性の向上、授業研究会の効率化、実践の日常化などに結び付きやすい。
	研究組織別編成	理論、授業研究、環境整備など、全教員を組織に配置することにより、それぞれの内容を深め、所属感・研究意欲の向上を図ることができる。
年齢別	同年齢編成	同年齢であるため、意見などを言いやすく協議が活性化される。協議が深まるため、新しい発想なども出やすく、さらに実践にも結び付きやすい。
	異年齢編成	ベテランの教員が、若手教員に対して授業づくりにおける知識・技能の伝達はもちろん、疑問や悩み、校務の進め方、子どもや保護者への対応などの相談に乗り、知識や経験を伝えることができる。

### 3 チームの役割について

チームには、授業改善に向けた取組を日常的に推進するために、次のような役割が求められます。

- ・ チームによる事前研究会1では、授業者の授業検討と授業づくりの支援を行います（P. 9参照）。このことにより、全体での事前研究会2の効率化（時間短縮と内容の深まり）が図られます。
- ・ 事後研究会では、班ごとに行うワークショップ型協議のファシリテーター役を務め、話し合いをリードします（P. 12参照）。このことにより、全体での事後研究会の効率化（時間短縮と内容の深まり）が図られます。
- ・ 事後研究会後には、授業改善に向けた取組の日常化のために、チーム内でアドバイスし合ったり、改善授業を相互に参観し合ったりするなど、実践における協力者（改善授業の「ポイント授業観察」：次ページ参照）となります。

チームが「事前研究会」「事後研究会」「事後研究会後」の役割を果たし、効果的に機能することが、授業改善に向けた取組の日常化につながります。また、このような授業改善に向けた継続的な取組が、校内研修と個々の教師の授業力向上を結び付ける鍵となります。

### 4 効率化・日常化に向けた「ポイント授業観察」

短い時間でも、チームで話し合う機会を多くすることで、疑問や悩みなどの相談等もしやすくなります。また、授業を見合うことや、授業に対する意見を交換し合うことなども自然にできるようになってきます。このような機会をもつことが、チーム内の同僚性・協働性を高め、やがては、チームを越えて学校全体（全教師）で日頃から授業を見合ったり、授業について話し合ったりできるようになると思います。

授業を改善するには、授業研究を数多く行うことが望ましいのですが、授業者にも参観者にも負担がかかりますし、事後研究会の時間を確保す

るのも難しいのが現状です。

そこで、授業者と参観者の負担を軽減し、授業改善への取組の日常化を図る方法として「ポイント授業観察」を提案します。

「ポイント授業観察」は、1単位時間の中で、「展開部分における教師の発問と子どもの反応を見てほしい」など、ポイントを絞って行う授業研究です。次の3つを原則とします。

- ① 10分～15分で行う授業観察とする。
- ② チームのメンバーは、参観する。他チームのメンバーの参観は自由とする。
- ③ 付箋紙を活用してコメントを交換し、事後研究会は行わない。

「ポイント授業観察」を実施する際には、観察の視点等を明記した授業展開の指導略案（下図参照）を活用します。

<h2>ポイント授業観察の 進め方</h2>	<h3>指導略案</h3> <p>&lt; 単元名・本時の目標 &gt;</p> <p>単元名 比べ方を考えよう 本時の目標 面積、人数が異なる場合の温み具合の比べ方を理解する。</p> <p>&lt; 本時の展開・授業改善の方策 &gt;</p> <p>1 本時の課題をつかむ。 どのパンガローがこんでいるか調べよう。 2 解決の見通しをもつ。 3 自力解決をする。 &lt; ポイント観察 10:45～11:00 &gt;</p> <p>観察の視点</p> <p>○ 視点を明確にした理り上げの工夫 一人の考えをみんなに広げさせるための支援 ・数理のよさを生かした考え方からよりよい考えを見付けさせるための発問の工夫</p> <p>4 結果とその理由について話し合う。 (1) それぞれの考えを発表し合う。 ○ 1㎡あたりの人数で求めた児童 ○ 1人あたりの面積で求めた児童 ○ 公倍数で求めた児童 (2) 早く・簡単・正確・いつでもの観点から、考えのよさに気付く。 (3) 単位量で求める方法を理解する。</p> <p>5 温み具合の比べ方を整理する。 6 適用問題を解決する。 7 本時のまとめをする。</p> <p>&lt; 反省・考察 &gt;</p> <p>参観者の付箋紙。授業後に貼付して授業者に渡す。</p>
----------------------------	---

授業者は、この指導略案を作成し、参観者に事前に配付します。参観者は、授業改善の視点に沿って授業を参観し、気づきやコメントを付箋紙に記入します。授業後に、指導略案に貼付して授業者に渡します。授業者は、集まった付箋紙を基に授業の振り返りを行います。授業改善に向けた取組の効率化・日常化を図るためにも、「ポイント授業観察」は有効です。

## 5 相互作用による日常化の推進

チームで、個々の教師の授業改善をどう進めていくか、チームのメンバーが互いにどう関わるかを相談します。相談の時間は放課後や空き時間など、隙間の時間を活用します。



- ・ ○○○に力を入れようと思っているんだ  
(共有→互いにアドバイス)
- ・ 今度授業をするので、この部分を見てほしいな  
(検証→改善)
- ・ 今度の授業でT・Tに入ってもらえないかな  
(授業の充実) 等

授業改善に向けてチームで取り組むことは、時間が確保しやすいという状況をつくるだけでなく、自分の授業力の向上に関して様々な角度から考えるきっかけとなります。個々の教師の授業改善への意識の高まりや、授業改善に向けた深まりのある取組に結び付きます。

また、学校の全体会等で、チームの取組状況を報告し合ったり、情報交換したりする場を設けることも、取組の日常化を推進するのに効果的です。所属するチーム以外の取組を知ることで、「ポイント授業観察」に他チームのメンバーが参加したり、職員室で授業づくりについて、違うチームのメンバーが意欲的に相談し合ったりするなど、相互作用が高まります。チームで生まれた相互作用が、個々の教師間のチームを超えたフレキシブルな相互作用に広がり、学校全体での取組の日常化につながると考えます。



## 個人の授業力向上につながる校内研修システム

次ページの図は、主に、1つの研究授業から次の研究授業までの流れを説明したもので、左側が「学校全体の研究」、中央が「チームとしての取組」、右側が「個人としての取組」の流れを表しています。学校全体の研究に対して、時には個人として、時にはチームとして取り組んでいくことで、学校全体としての課題の解決と一体的に個々の教師の授業力向上が図られることを示しています。

### <各段階における主な活動内容>

- ①…「授業力チェックシート」「授業力分析シート」を活用して授業力の課題を明確にする。
- ②…個々の授業力の課題を加味し、学校全体の研究主題を設定する。
- ③…授業づくり（指導案検討、参観視点の共有など）をチームで行う。
- ④…練り上がった指導案で研究授業を行い、全教師またはチームで参観する。
- ⑤…焦点化した視点で子どもの姿等を見取り、付箋紙に記入する。
- ⑥…記入した付箋紙を持ち寄り、ワークショップ型協議を行う。
- ⑦…授業や事後研究会で学んだこと、授業改善の具体策を「授業改善シート」に記入する。
- ⑧…協議のポイントや「授業改善シート」等を掲示して共有する。
- ⑨…個々の教師の授業改善をどう進めるか、チームで検討する。
- ⑩…改善授業のポイント授業観察等により、相互に参観する。
- ⑪…学校の全体会等で、各チームの取組報告や情報交換等を行う。
- ⑫…自主的に授業を見合ったり、日常的に授業づくりについて話し合ったりする。

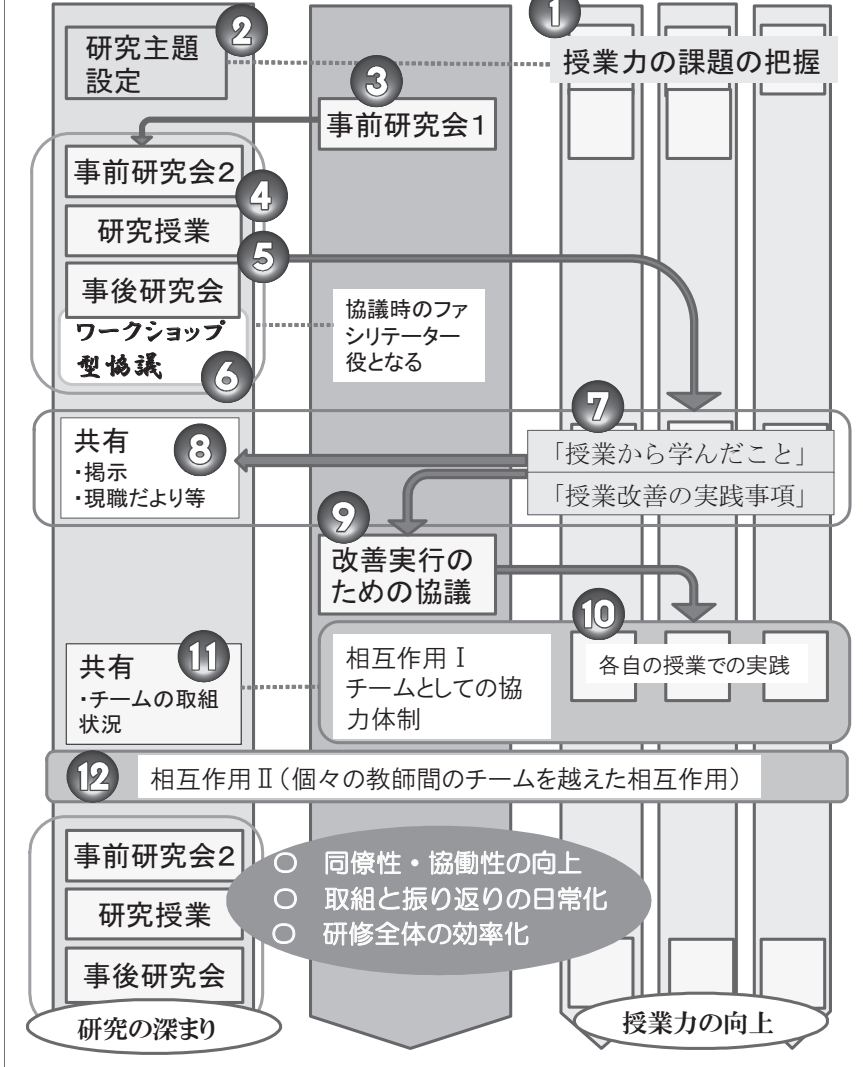


## < 個人の授業力向上につながる校内研修システム >

学校全体の研究の流れ

チームとしての取組

個人としての取組







## 授業研究推進に向けて

「授業を改善する」ために最も有効な研修は「実践的研究」であると考えられます。それは、「実践的研究」が目の前の子ども一人一人の実態や教師それぞれの授業課題から出発し、研究と実践の繰り返しの中で、研修、研究の成果が子どもに具現化していくことをめざすものだからです。そのため研修主任は、具体的な推進計画を作成し、全教師の共通理解を図りながら、研究や実践に継続性と発展性をもたせるようマネジメントすることが大切です。Plan（計画）-Do（実行）-Check（評価）-Action（改善）のサイクルを効果的・効率的に機能させることが求められます。

PDCAサイクルは、大きく2通り考えられます。1つは長期的サイクルで、1年間の研究をつなぐものです。年度半ばにカリキュラム改善の場を設けたり、定期的に「授業力チェックシート」等で自己評価・自己分析したりすると、サイクルがより活性化します。もう1つは短期的サイクルで、授業研究と日々の授業、研究授業と授業研究をつなぐものです。そのための校内研修システムがP. 25のシステムです。

### C 授業研究の評価

研究主題に迫る授業研究になっていますか？

### A 年間計画の改善

前年度の課題を分析し、改善計画を立案していますか？

### P 年間計画の作成

研究計画（研修主題、研究授業、研究組織等）と研究の評価計画を作成していますか？

## 研究推進のマネジメント

### D 研究授業を核とした授業改善の取組

中間のまとめで改善したことを生かし、日々の授業実践において、PDCAサイクルを機能させていますか？



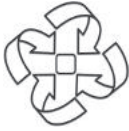
### C-A-P 中間のまとめ （カリキュラム改善）

中間段階での成果と課題を整理し、カリキュラム改善していますか？  
改善の方向性を探るワークショップ型協議を行ってみましょう。

### D 研究授業を核とした授業改善の取組

日々の授業実践において課題解決に向けた手だてを実践しつつ、新たな課題を発見する等、PDCAサイクルを機能させていますか？





## Ⅱ 実践編

### 校内研修の実際

中学校1校，小学校2校に協力していただき，実践を進めました。校種や学校規模の違いも含めた各学校の特色や希望等に合わせて，自校化したシステムを紹介します。それぞれの実践協力校の特色等は下記のとおりです。

#### 1 T中学校

- ・ 学級数6の小規模中学校である。
- ・ チームは異教科編成とした。
- ・ チームと学校全体を組み合わせる授業研究を進めた。

#### 2 S小学校

- ・ 学級数6の小規模小学校である。
- ・ チームは同教科・ブロック編成とした。
- ・ 基本的には，学校全体で授業研究を進めた。

#### 3 N小学校

- ・ 学級数13の適正規模小学校である。
- ・ チームは同教科・異年齢編成とした。
- ・ 基本的には，チームを中心として授業研究を進めた。

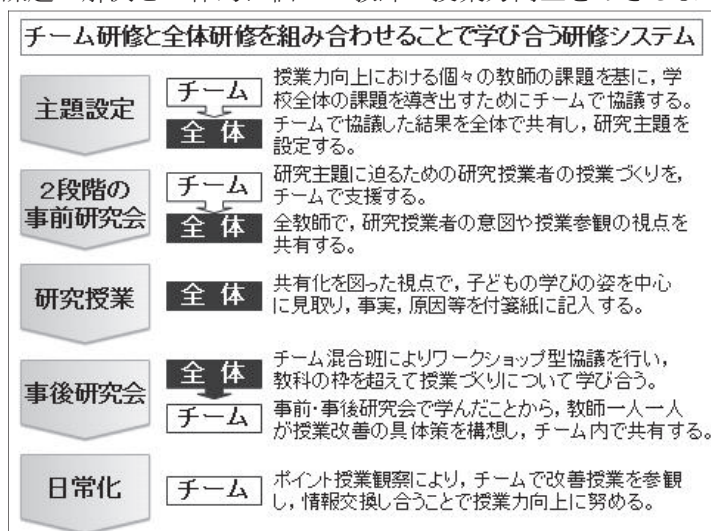
## T中学校の取組 異教科のチーム内で学び合う研修の例

### 1 T中学校の校内研修システム

#### 課題

- 教科担当者が一人の教科が多く、授業改善等に関して相談する相手や機会が少ないと感じている教師が多い。
- 今年度、研修主任が替わり、研究主題も新たに設定するという状況にあり、校内研修の進め方に不安を感じている。
- 部活動指導等のため、教材研究や授業研究会の時間の確保が難しい状況にある。
- 研究授業を全職員が行ったが、事前研究会は行っていない。

上記の課題を受けて、T中学校では、基本的には理論編で記載した校内研修システムに基づき、チーム研修の機能を生かしながら、学校としての課題の解決と一体的に個々の教師の授業力向上をめざしました。

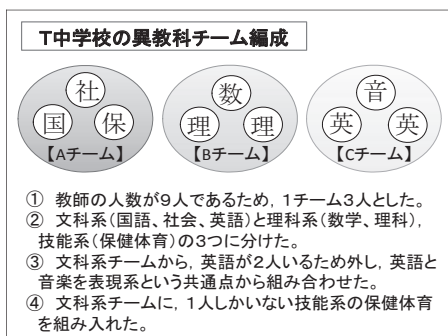


## 2 教師個人の課題に結び付けた学校研究主題の設定

T中学校では、今年度、新たに研究主題を設定するために、個人⇒チーム⇒学校全体という流れで課題を分析し、主題設定に結び付けました。

### (1) チーム編成

T中学校の課題の1つにも挙げられているように、教科担任制をとる中学校では、「授業づくりについて相談する相手や機会が少ない」と感じる教師が多いものです。特に学校規模が小さい場合、教科担当者が一人しかいない状況になるため、授業力向上については、



資料 1

同教科だけでなく異教科から学ぶ姿勢も大切です。そのため、T中学校では、授業力向上における個々の教師の課題を基に、様々な教科に共通する学校全体での課題を導きだし、研究主題を設定しました。個人の課題と学校全体の課題をつなぎ、学校全体での研究を深めることで、教科の枠を超えて互いに学び合い、個々の教師の授業力向上を図る研修にしました。理論編でも記載した(理論編P. 20参照)ように、個人と学校全体をつなぐ重要な役割を担うのがチームです。T中学校のチーム編成については資料1に示したとおりですが、どのようなチーム編成にするかは、T中学校のように、教科担当者数、教科の特性、年齢等、学校の実態に合わせて行う必要があります。今年度の実践後に、T中学校の教諭は、次のような感想を述べています。

授業力チェックシートを活用し、課題意識をもって授業に臨むことができた。研究授業を参観し、他教科であっても、教師の働きかけや生徒への関わり方など参考になることは多く、自分の授業にどのような形で取り入れられるか意識して授業をするようになった。

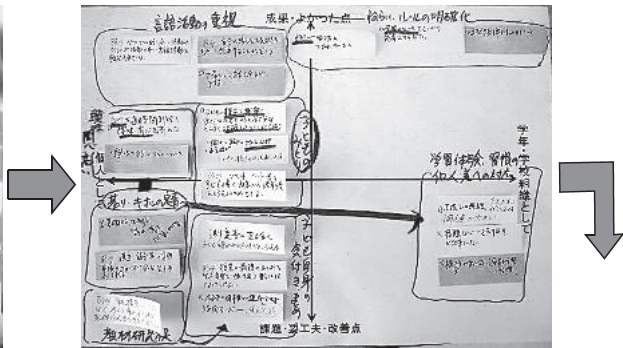
## (2) 研究主題の設定

ここでは、授業力向上における個々の教師の課題を、どのようにして研究主題の設定に結び付けたかを説明します。

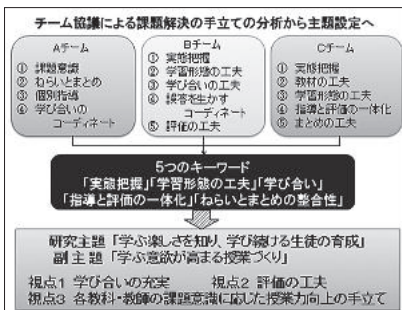
T中学校では、まず、教師一人一人が作成した「授業力チェックシート」「授業力分析シート」を基に、教師の授業力の視点と子どもの成長の視点から、よかった点と課題だと思われる点を色分けした付箋紙に記入しました(資料2-①)。その後のチーム協議では、マトリクスシートを用いてKJ法により課題を整理し、特に解決が必要だと思う課題を1つ選びました(資料2-②)。次に、選んだ課題を解決する手だてを、チームごとに協議し、再びKJ法により整理した後に優先順位を付けました(資料2-③)。最後に、各チームの協議結果を分析し、浮かび上がった5つのキーワードから研究主題を設定しました(資料2-④)。



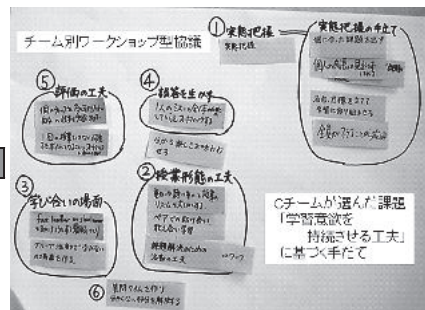
資料2-①



資料2-②



資料2-④



資料2-③

### 3 2段階の事前研究会

T中学校では、昨年度は行っていなかった事前研究会を2段階で実施しました。T中学校の課題の1つでもある「時間の確保が難しい」という中で、あえて、事前研究会を2段階で行ったのは、研究授業者でない場合の課題意識を高め、事後研究会の焦点化・効率化を図るためです。また、少人数チームで事前研究会を行うことで、同僚性・協働性を高めることも視野に入れました。

#### (1) チームによる事前研究会 1

事前研究会1は、少人数チームによる授業づくりのための協議で、隙間時間等を活用して行いました。チームのメンバーは、この事前研究会1で、研究授業者の授業づくりの支援を行うこととなります。T中学校では、この事前研究会1を授業構想シート（資料3）を用いながら進めました。研究の3つの視点に基づく手だてを明確にすることで、担当教科の違いによるギャップを埋め、協議を深めるために、研修主任と相談しながら作成しました。

#### (2) 全員参加の事前研究会 2

事前研究会2は全員参加を原則とし、授業者の意図や参観の視点を確

授業構想シート		授業者 ( )	
1 本時のねらい 道徳的価値の確立に重点を置く見直し、視察をもとに展開計画を見直しととも、モデルを門下で説明することができる。			
2 授業構想 (1) 半後の実態・感情の把握			
生徒の実態		教師の課題（授業力分析シートから）	
実態：視察などから本時の実践に付いては、授業を立止、実態・観察の結果を整理するなどの学び方や科学的な思考力を身につける必要がある。		子どもの姿を振り返る見直しや半後自身に振り返りの場を設定することが少ない。	
(2) 本時の手だて			
手だて	半後の実態	評価の工夫	各目的授業力への手だて
生徒	モデルを用いた話し合いで、直前・直後に協働する層の個別性を意識できるような工夫をする。既、既習の考えを大切にしながら学習につなげるようにする。	評価解決に資する半途中、おわりにグループワークを併せて、自らの学びの法則性を見直し、振り返りを行う。	まよめの段階に本時で学んだことを振り返り、既習の自分と比較し、本時の学びを整理する。
教師	実態の把握と考察の場をモデルを用いることで、人の考えを引き出すように促し話し合いを充実させることなどが、実践の充実につながる。	パフォーマンス課題を提示しグループワークを行い、課題解決。振り返り、自己自身が自らの学びを評価し振り返りを行う。	振り返りの場を設けることで、全員の学びを振り返り、自己自身が自らの学びを評価し振り返りを行う。
3 目指す生徒像（具体的な学習力の目標を）			
「好き」「好き」「好き」「責任、など責任を負った態度のある生徒を、モデルと連携しながら育てたい。			
見直し段階に付いては、既習と関わりを止めに促し、その結果から導かれる責任・態度の考えを、「既一歩前進する」として、「モデルの振り返り」を、というモデルの特性と実態結果とを結び付けながら、取組んでいる。			

資料3

認することを目的に短時間で行いました。

また、事前研究会2の最後に、チームの取組を報告する機会を設定しました。これは、システムの核となるチームによる取組を確認し合うことで、チーム間、そして、学校全体の授業力向上への相互作用を高めることにつながると考えたからです。報告会のBチームの発表を紹介します。

Bチームは、学び合いの充実という視点から、自分の考えをしっかりともつというところを中心に進めていきたい。また、何が分かったかということと言えるような状態にしていくために、評価の工夫では、振り返りの場を工夫するというをやっていきましょうということになった。

#### 4 チーム協議を取り入れた事後研究

T中学校の事後研究会は、資料4に示したように、チーム混合班によるワークショップ型協議を中心に、短時間で終わることができるように進めました（理論編P. 14～16参照）。

資料5を基に、詳しく説明します。ま

ず、A～Cの3つのチームから研修主任と研究授業者を除いて、チームの人数がおおむね均等になるように2つの班をつくりました。班別ワークショップ型協議では、授業者がいるチームのメンバーがファシリテーター（推進役）となり、協議をリードしました。このようなシステムにしたのは、事前研究会1で、チームのメンバーは授業者とともに授業づくりを行い、授業者の願いや意図を理解しているからです。このワークショップ型協議の際には、研修主任、授業者は班に入らずに、2つの班の協議を総括的に見るようにしました。このことにより、授業者は2つの班の質問にそれぞれ答えたり、2つの班の協議を踏まえて自分の授業を振り返ったりすることができます。

また、研修主任には、班別協議を総括的に見るだけでなく、すべての

T中学校の事後研究	
1 開会の言葉	50分
2 協議(40分)	
(1)授業者自評(5分)	
(2)ワークショップ(30分)	
(3)情報交換(5分)	
3 振り返り(5分)	
4 授業者から(5分)	
5 閉会の言葉	
6 チームの話し合い	

資料4



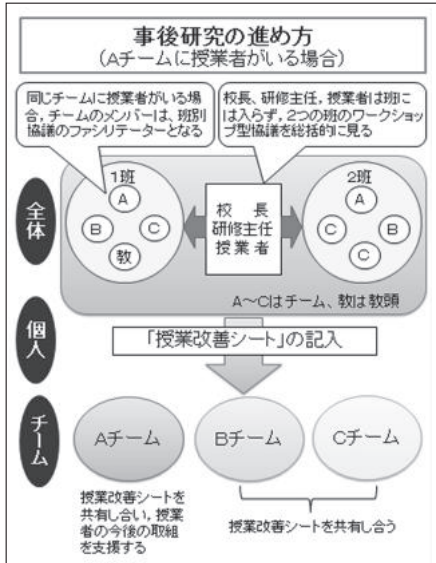
チームの事前研究会 1 に参加し、授業者の授業づくりの意図やねらいを理解してもらいました。各チームや学校全体における研究の深まりを把握したり、チーム間の調整を行ったりしてもらうためです。

そして、ワークショップ型協議の最後には、各班の協議結果を情報交換し、その後、「授業改善シート」を記入しました。

シートを記入した後は、所属するチームに分かれ「授業改善シート」を発表し合い、授業や事後研究会からの学びや授業改善の具体策を共有しました。さらに、チームに授業者がいる場合には、授業者の今後の取組を協議し、次のステップである取組の日常化に向けてチームで協力し、実践に結び付けました。

T 中学校では、このような取組を繰り返すことで教科の枠を超えて学び合い、同僚性・協働性を高めただけでなく、校内研修を活性化することができました。また、このような研修システムにしたことで、授業者や参観者が自らの授業実践を省察する機会が多くなり、個々の教師の授業力向上につながったと考えます。

最後に、T 中学校の授業改善シートを紹介します（右図参照）。



資料 5

**理科の授業研究**

授業改善シート

— 授業・事後研究会から学んだこと —

- 子を具体的に立てさせることで、実験の着眼点が変わってくる
- 結論は端的にまとめてよいが、子どもの思考を回せる上で、子どもの具体的な言葉を取り上げていく

— 授業改善の実践事項 —

- 課題意識を高めるための工夫
- 子どもの疑問等から出発する姿勢を、教師自身をもって授業に臨む

**英語科の授業研究**

授業改善シート

— 授業・事後研究会から学んだこと —

- デモンストレーションをペア→全体→再度ペア確認の手順を踏むことで、より確かな課題意識を子どもがもっていた

— 授業改善の実践事項 —

- 全体で確認したことを再度ペアで確認する、個別に書かせる
- 課題に対してどう考えるか、各自に明確に意識させる



## S小学校の取組 全体の取組の中で自己課題の明確化を図った例

### 1 S小学校の校内研修システム

#### 課題

- 異動で多くの教師が入れ替わり，教師間相互の関係が浅い。
- 校内研究について教師間で共通理解を図りながら，深めていく必要がある。
- 今年度から新しい研究主題，研究領域で取り組むことになっており，研修主任として進め方に不安がある。

S小学校では，子どもたちの実態から見えてきた課題の解決をめざして研究主題を設定しました。この主題での研究がスタートの年度であり，研究教科も変わったため，主題追究に向け共通理解を図りながら，研究の深まりをめざす必要がありました。そのため，個々の教師の授業力向上に向けた取組に対して次のような不安をもっていました。

#### 先生方の声



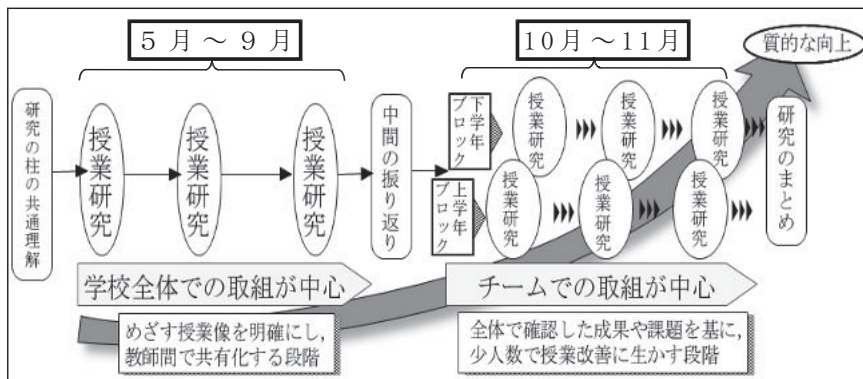
「学校の研究と個人の研究の両方をやるのは大変なのでは？」  
「個人の課題はそれぞれ違うから全体の研究が深まらないのでは？」

S小学校では，学校全体，チーム，個人での研修を効果的に機能させ，学校の研究主題を追究する中で個々の教師の授業力向上を図るために，昨年度までの取組も継続させながら右図の研修システムで授業研究を進めることとしました。



## 2 年間の推進計画の工夫

前ページの研修システムに基づき、全体で共通理解を図りながら、学校の主題追究と個人の授業力の向上を図るために、年間の研修を以下のような流れで進めました。



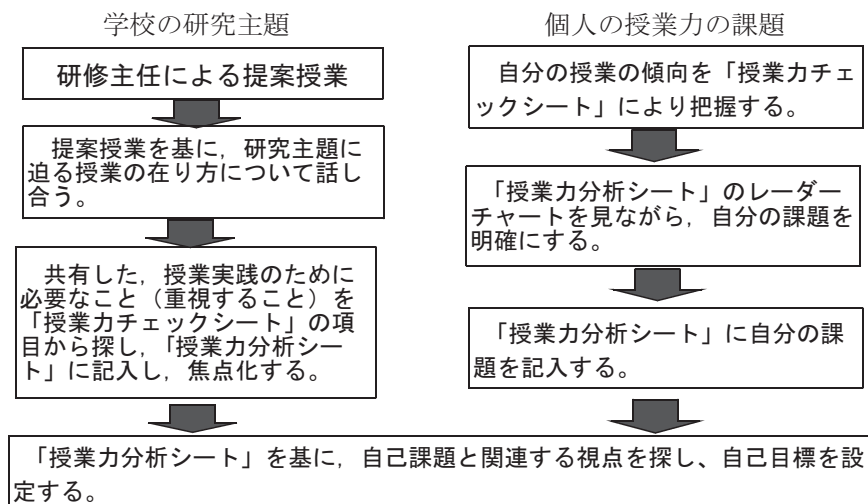
授業研究を前期（5月～9月）と後期（10月～11月）の2段階とし、右下の計画のように年間で一人2回の研究授業を行いました。前期は全員による授業研究を通し、学校の研究主題や手だてに基づき、めざす授業の在り方を探りながら共通理解を図りました。ただし、各授業研究を通して学んだことは「授業改善シート」（理論編P. 18参照）で振り返り、一人一人が日々の授業の改善に生かしました。後期は前期実践の成果や課題を基に、チームを中心とした授業研究により、「ポイント授業観察」等（理論編 P. 22参照）を通して、日常的な取組の中で授業の改善を図りました。

月	実践内容
4月	・今年度の研究計画立案 ・県教育センター説明会
5月	・児童のアンケート内容検討 ・アンケートの実施、結果分析 ○授業実践Ⅰ①（6年）
6月	○授業実践Ⅰ②（4年） ○授業実践Ⅰ③（2年）
7月	○授業実践Ⅰ④（5年）
8月	
9月	○授業実践Ⅰ⑤（3年） ○授業実践Ⅰ⑥（1年） ・前期実践の振り返り
10月	○授業実践Ⅱ①（5年） ○授業実践Ⅱ②（4年） ○授業実践Ⅱ③（3年）
11月	○授業実践Ⅱ④（2年） ○授業実践Ⅱ⑤（1年） ○授業実践Ⅱ⑥（6年）

年間の研究推進計画の一部

### 3 学校の研究主題と関連付けた自己目標の設定

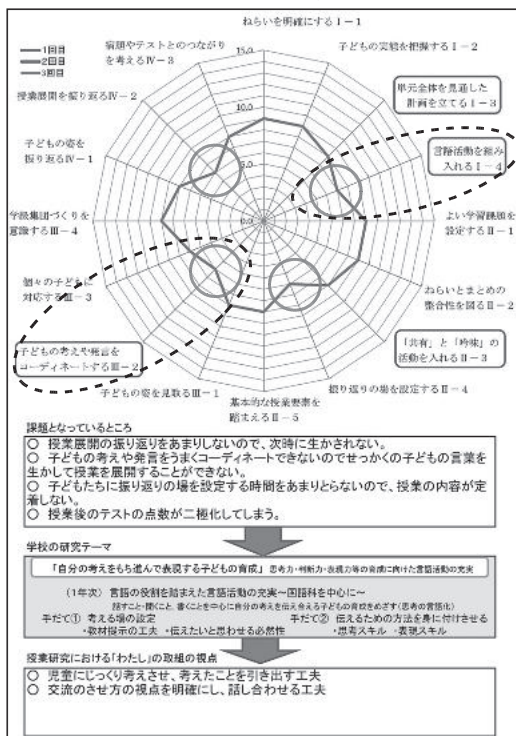
授業研究における各教師の目標を明確にするために、学校の研究主題と個人の自己課題との接点を見だし、関連付けを図りました。具体的には「授業力チェックシート」「授業力分析シート」を活用し、次のような流れで関連を図っていきました。



S小学校では、研修主任による「提案授業」を基に、研究主題や手だてを具現化した、めざすべき授業の在り方について話し合い、「授業力チェックシート」「授業力分析シート」から、大切にしたいポイントとなる視点を決めました。話し合いの結果、「単元全体を見通した計画を立てる」「『共有』と『吟味』の活動を入れる」「言語活動を組み入れる」「子どもの考えや発言をコーディネートする」の4点に焦点化しました。

そして、次ページのように、「授業力分析シート」におけるレーダーチャート外側の視点を四角枠で囲んで明示し、個人の授業力の傾向（レーダーチャート）と比較し、重なる部分を関連付けながら、自己目標を設定しました。レーダーチャートにおける評価の低い部分が自分の授業力の課題となる視点（○で囲まれた部分）ですが、A教諭の例のように、

外側の項目と全てが重なる訳ではありません。しかし、「授業力チェックシート」の項目は、それぞれが独立したものではなく、単元や授業の構想、展開、振り返りと連続したものとなっています。ですから、ある部分を切り口として取り組んだとしても他の視点の向上にもつながると考えます。A教諭の場合は、「言語活動を組み入れる」「子どもの考えや発言をコーディネートする」という視点(②)で囲まれた部分から、自分の授業改善に向けた目標を設定しました。



A教諭の「授業力分析シート」

以上のように、授業力を視点とし、学校の研究主題と自分の授業力の課題を関連付けた目標を設定しました。また、個々の目標を公開し互いに知ること、相談したりアドバイスしたりと協働的に校内研修を進めることにつながりました。さらには、9月に全体で「中間の振り返り」を行い、自己目標の見直しを図った上で、後期におけるチーム中心の授業研究を行いました。

A教諭の自己目標



【5月】 ○児童にじっくり考えさせ、考えたことを引き出す工夫をする。  
○交流のさせ方の視点を明確にし、話し合わせる工夫をする。

【9月】 ○子ども自身がよく考え、考えたことをまとめたり、それについて伝えたいと思わせたりすることができるような発問を工夫する。  
○子どもの発言を生かして授業をつくりあげることができるようなコーディネート力をつける。

#### 4 模擬授業による事前研究会

S小学校では、前年度取り組んできた全員参加での模擬授業による事前研究会を継続し、授業研究における焦点化や協議の深まりをめざしました。模擬授業は、教師同士が授業者と児童生徒役になって、実際に授業を実施する授業研究の方法です。子どもの立場で授業を考えることで、授業者だけでなく児童生徒役の教師にも、授業の工夫や改善の手だてに新たな気付きが生まれます。また、教師と児童生徒のそれぞれの立場から話し合いができるため、より一層授業研究を深めることができます。以下にS小学校の事前研究会の進め方を示します。



##### 準備段階

- 授業計画立案・教材研究
- 学習指導案の作成・検討

チームで相談したり協力したりしながら模擬授業の準備を行います。

##### 事前研究会 1（模擬授業）

###### ① 授業者からの概要説明

- 授業テーマとねらいについて
- 単元の流れ
- 指導のポイント
- 授業者の悩み(気になる児童の様子等)

あまり時間をかけずに5分程度で行います。

授業者の授業力向上に向けた課題改善の取組についても、指導案に位置付けます。

###### ② 模擬授業の実施

- 導入から終末まで実際の授業と同じ流れで行う。

途中、解説等は行わずに進めます。

- 授業者は、発問や指示、板書、教材やワークシートの提示等、児童に対応する時と同じように行う。
- 児童生徒役は、学習課題や発問、手だてや授業テーマに対する児童生徒の反応を想定した発言や活動を心がける。

授業に必要な技術を学ぶこともできます。

- ・教材提示の方法や順序
- ・発問の内容
- ・板書の位置や整理の仕方
- ・児童生徒の意見の取り上げ方等

児童生徒の立場から授業を考えることができます。

### ③ 模擬授業後の協議

- 児童生徒の立場に立って、よい点、課題点を共通理解するとともに、改善案(自分ならこうする)などを提案する。



### チームによる検討

- 授業者は模擬授業での意見を基に、指導案の検討、改善をする。

### 事前研究会 2

時間は10分程度で  
終了します。

- 授業者は、「修正版指導案」を基に授業のポイントや意図、模擬授業後の改善点等について説明する。
- 参観者からの質問があれば質問をする。授業者は質問に対して説明をする。

修正点は手書きで記載します。

### 修正版指導案



### 観察の視点の共有

- 参観者は授業のポイントを共通理解し、研究授業に参加する。

## N小学校の取組 チームで取組の日常化を図った例

### 1 N小学校の校内研修システム

N小学校が抱える校内研修における課題を踏まえ、「効率化・日常化の推進」を図る研修システムを以下のように構築しました。少人数チームのよさ（理論編P. 20参照）を生かしたシステムです。

#### 課題

- 全職員が特設クラブを担当しており、授業研究会の確保が困難である。
- 職員数が多いため、研究授業数が多いと自習にする時数も増える。
- 中堅教員が少なく、年齢構成や経験年数の不均衡が見られる。
- 授業者として研究授業に臨む時と参観者として臨む時では、自分の授業力向上へ向けた課題意識の差が大きい。



## 授業力を高めるチーム研究 <N小学校>

～授業者を支えシステムの機能化を図る  
同教科の教師チームによる授業づくりの過程～

組織の力と個の力を  
効果的に作用させる  
支援体制にしよう!



子どもの変容を共通理解、  
成果が表れたら  
喜びを共有しよう!

教師間の学び合う姿勢・授業改善

子どもの学び・子どもの力

チーム  
事前研究

チーム  
授業研究  
事後研究

チーム  
事後実践

授業者の授業構想を  
基に授業づくりの相  
談を行い、授業を再  
構想する。

授業者の授業力向上の  
観点も含め、授業を見る  
視点を明確にする。チ  
ームで振り返り、授業者も  
参観者も自分の授業や  
研究の方向性を見直す。

**授業リフレクション**

振り返りを基に次の  
授業に向けて工夫す  
ることや配慮事項を  
決めて授業を再構想  
する。ポイント授業観  
察で授業改善の日常  
化を図る。

模擬授業・先行授業

授業観察シート

ポイント授業観察

自己効力感を高めるチーム研究  
教師のアクティブ・ラーニング



## 2 課題の明確化(チーム研究の方向性)


N小学校は、3つの教科・領域部会(国語・算数・特別支援)に分かれて研究を推進しました。所属部会は本人の希望で決定し、部会の中での少人数チームは、学年や年齢を考慮し、研修推進委員会で編成しました。

まずは、「授業力チェックシート」を基に、各自の授業における課題を明確にしました。次に、「授業力分析シート」の個人シートとチーム合計シートを基に、チーム研究の方向性について共通理解を図りました。用いた手法は「セブncross法」です。セブncross(7×7のマトリクス)を使い、課題を整理し、解決のアイデアを発想していく手法です。意見交換をしながら、優先順位を付け、方向性を見いだすことができます。N小学校での実践例は、以下のとおりです。

### セブncross法の進め方


- ① 個々の授業力の課題を洗い出す (5分間)
- ② 出てきた課題から似ているものをまとめ (15分間) 小見出しをつける
- ③ 左から重要な順に横7列に並べ、課題を (5分間) 整理する
- ④ 各課題についての解決策を話し合い (30分間) 重要な順に各項目の下に縦7列に並べていく
- ⑤ 「課題と解決策」が重要な順に抽出された (5分間) 7×7のセブncross表の完成

すぐに解決したい課題と解決策から考えることで 今後の方針を客観的に決定できます!!



### ① 課題の洗い出し


～授業力分析シートを基に～



5年生 6年生 7年生

チーム合計

個人の課題は? メンバー共有の課題は? 解決すべき優先順位は?



### ③～⑤ 「課題と改善策」の重要度検討

「チームの授業力を向上させるには」

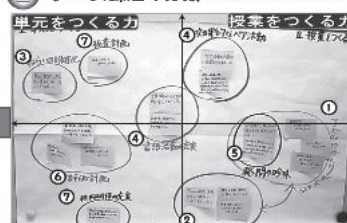
セブncross表 完成

課題	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1	...	...	...	...	...	...	...
2	...	...	...	...	...	...	...
3	...	...	...	...	...	...	...
4	...	...	...	...	...	...	...
5	...	...	...	...	...	...	...
6	...	...	...	...	...	...	...

※課題も解決策も必ず7つとは限りません。

### ② チーム課題の分類

～授業力の4つの要素から～



単元をつくる力 授業をつくる力

① 単元をつくる力 ② 授業をつくる力

③ 単元をつくる力 ④ 授業をつくる力

⑤ 単元をつくる力 ⑥ 授業をつくる力

⑦ 単元をつくる力 ⑧ 授業をつくる力

### 管理職の声



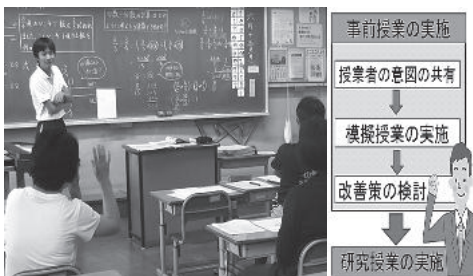
「観点が明確になっているので客観的に授業力を分析できると思います。」  
 「全教師が同じ観점에서授業力をチェックしたり分析したりするので、課題が見付けやすく、解決に向けて共通理解を図りやすいと思います。」

### 3 チーム授業研究の活性化

N小学校のチーム研究は、P. 40に示された研修システムを循環させて進めました。

#### (1) チーム事前研究会

チーム事前研究会は、「模擬授業」や「先行授業」などアクティブ・ラーニング型研修を取り入れ、より実践的に行いました。



「模擬授業」は、授業者以外のチームメンバーが児童役になるため、学習者の視点からも授業を分析することができます。課題を発見したり改善のアイデアを出し合ったりして、参加者全員で授業をつくることができます。参加型の事前研究会により、「授業者だけの授業」から「チームみんなの授業」へと意識を変容させ、授業づくりへの意欲を高めることができました。さらに、めざす授業がイメージしやすくなり、授業参観の視点を明確にすることにもつながりました。

また、自分自身の授業の前にほかの学級で授業をしたり、ほかの教師の授業を見たりする「先行授業」では、指導案検討では見いだせなかった授業構想の問題点を修正し、再構成する力を高めることができました。

#### (2) チーム事後研究会

N小学校では、研究授業後に「授業リフレクション（実践を反省的に考察する授業研究）」を実施しました。右にある4つの案を基に、チームに合った方法を選び、参加者全員が自分の事として授業を振り返りました。

##### <A案>対話で授業リフレクション

チームで対話をしながら進める。授業を参観した者が、授業者に質問しながら、授業者自身の振り返りを促進する。授業中に見られた子どもの事実から学びの解釈を行い、授業を振り返る。終了後、各自レポートを作成する。

##### <B案>FGで授業リフレクション

<A案>同様、対話で授業リフレクションを進める。対話を通して生まれた考えをワークシートに文字や図形で表したり、付箋紙に書いて貼ったりする。FG(ファシリテーション・グラフィック)で可視化することで思考が促される。

##### <C案>板書で授業リフレクション

課題に対する改善策を出し合い、「自分だったらこうする」という提案をする。そして、その場で模擬授業をしてみる。模擬授業を通して改善策を検討する実践的な協議にする。板書は記録として蓄積する。

##### <D案>指導案で授業リフレクション

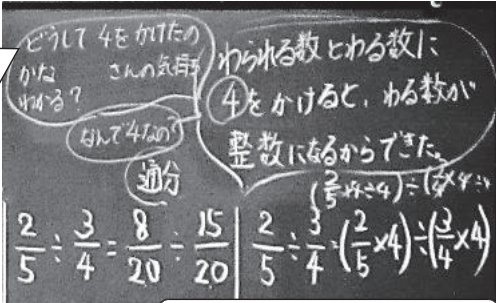
課題に対する改善策を整理し、指導案を修正する。朱書きで書き込みを行うことで、何を改善するために、どのように修正したのかわかるようにしておくとい。

「授業リフレクション」では、事前研究会で共有した授業参観の視点に沿って話し合い、課題についての原因、今後の改善策などを見いだしました。N小学校の進め方は右のとおりです。見いだされた改善策は、チーム事後実践につなぎ、研究会の学びが日々の授業に生かされていくようにしました。〈C案〉と〈D案〉を組み合わせで行った算数科チームの実践記録を紹介します。下のとおりです。

**40分のできる授業リフレクション!!**

- 1 授業者は、授業参観の視点に即して自評を述べる。 **5分**
- 2 板書や各自の授業記録をもとに疑問を出し合い、代案を考える。 **20分**  
 ・授業者の立場から見た、意思決定上の疑問  
 ・参観者の立場から見た、意思決定上の疑問
- 3 代案をもとに模擬授業を行う。 **10分**  
 (代案を出して、参加者全員で授業をつくる。)
- 4 まとめる。(研修主任・教科主任・管理職) **5分**  
 研究主題・授業力向上の視点・教科テーマ等と関係付けて!  
 チーム事後実践の内容を決め、ポイント授業参観の視点を焦点化しましょう。


課題に対する改善案を黒板に記録しました。  
 本時のねらいに関わる場面で「ゆさぶりの発問で、根拠や理由を明確にすることが大切である」と話し合われました。「共有」と「吟味」の活動を充実させるための発問が、吹き出しで板書されています。



- 3 考えたことを発表し、話し合う。
- ・ 通分して、分子同士、分母同士計算する。  
 $\frac{2}{5} \div \frac{3}{4} = \frac{2}{5} \times \frac{4}{3} = \frac{8}{15}$
  - ・ 分母の最小公倍数をかけて、整数にして計算する。  
 $\frac{2}{5} \div \frac{3}{4} = \frac{2}{5} \times 20 \div \frac{3}{4} \times 20 = 8 \div 15 = \frac{8}{15}$
  - ・ 除数の分母を整数にする。  
 $\frac{2}{5} \div \frac{3}{4} = \frac{2}{5} \times 4 \div \frac{3}{4} \times 4 = \frac{2 \times 4}{5} \div 3 = \frac{2 \times 4}{5 \times 3} = \frac{8}{15}$
  - ・ わる数が1になるように、逆数をかけて計算する。  
 $\frac{2}{5} \div \frac{3}{4} = \frac{2}{5} \times \frac{4}{3} \div \frac{3}{4} \times \frac{4}{3} = \frac{2 \times 4}{5 \times 3} \div 1 = \frac{8}{15}$

- 20
- いろいろを見つけた ※ 短い時間か、ノート振する。(友達か知りして、簡単な方を持ってきた方がよいからできる。)
  - なぜ、20や4をかけるのか、理由を問い、よりよい考えを求めようとする意欲を高めさせる。
  - □を使った穴埋めの式を提示し、わる数の逆数をかける方法について考えられるようにする。
- 話し合われた改善策を整理し、指導案を修正しました。  
 より充実した学び合いにするために教師が行うべきコーディネートのについて、太字ゴシック(実際は朱書き)で書き込みました。

**管理職の声**



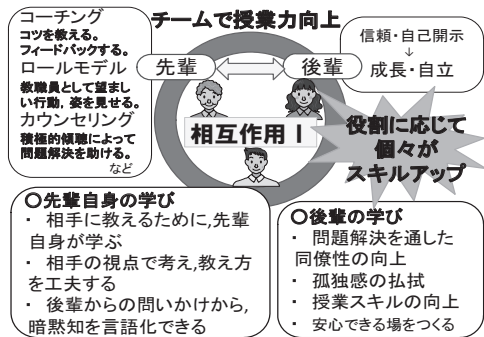
「授業リフレクションにおいて、授業の問題点や修正点が明らかになり、事後の焦点化した取組、授業改善へとつながりました。授業者も参観者も成果を実感できました。」  
 「チーム研究を主にしたので、効率的であり、協議がしやすく、意見の交流が活発でした。」

### (3) チーム事後実践

授業力向上のためには、授業研究を数多く行うことが有効です。つまり、経験を積み重ね、帰納的に学ぶことが必要なのです。しかし、授業研究会を数多く行うと授業者の負担も増えますし、参観者も自習を増やすことになってしまいます。事後研究会の時間の確保も難しいでしょう。そこでN小学校では、授業者と参観者の負担を軽減し、日常的に授業研究に取り組むことができるように、「ポイント授業観察」を行いました（理論編P. 22参照）。他チームからの自由参観もあり、相互作用Ⅱ（個々の教師間のチームを越えた相互作用）が促されました（理論編P. 23参照）。

チーム事後実践授業は、研究授業の授業者が行う場合と、ほかのチームメンバーが行う場合があります。どちらにしても、解決に向けてチームで取り組み、メンバーそれぞれの知識や経験を共有することが、相互作用Ⅰ（チームとしての協力体制）となってチームの授業力向上につながっていきました。

N小学校では、先輩教員から若手教員へ一方的に知識・技能を伝承するのではなく、右のような「年齢に応じて共に学び合うことができる協働体制」を確立することをめざしました。



#### 若手教員の声



「まだまだ力不足で自信もなく、なかなか自分の意見や考えがもてなかったのですが、協議で発言できずにいましたが、チーム内では気がねなく発言できました。分からないことも、先輩の先生に聞きやすかったです。」

#### 研修主任の声



「少人数で行うので、負担なく授業研究会の日程調整ができました。チーム協議は、話しやすく聞きやすいという良さがあります。一方で課題もあり、参観者が少ないと多様な視点で授業を見合うことができにくくなります。研修システムは、実態に応じてアレンジするとよいです。」

#### 4 チーム研究と学校課題研究との関わり

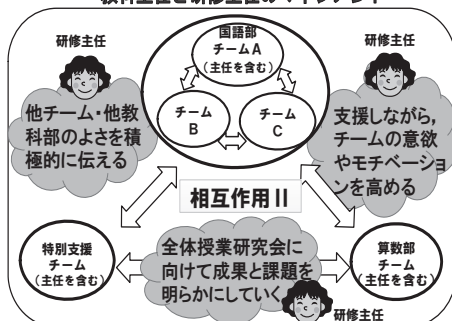
N小学校では、5つのチームで授業研究を進めました。それぞれのチーム研究は、学校課題研究の下に進められていきます。教科主任や研修主任は、チーム間、教科部会間の連絡・調整等を行い、組織の効果を最適化するマネジメントの役割を担いました。

N小学校の研修主任は、適宜、各チームの取組状況を「現職だより」に掲載したり、「授業リフレクション」「ポイント授業観察」の様子等を職員室の現職コーナーに掲示したりして、共有化を図りました。また、相互評価を取り入れた「授業観察シート」を活用するなど、教師が協働して成果を生み出

し、互いによい影響を受け合うことができるように工夫をしました。

チーム研究が活性化した2学期からは、全教師で授業研究を行う機会を設けました。チームのよさを生かし、基本システム（理論編P. 25参照）に沿って進めました。各チームの成果や課題、多様な考えに直接ふれ、先生方にとって、満足感や納得感のある研究となりました。

#### チームの取組を学校全体で共有するための教科主任と研修主任のマネジメント



授業観察シート		平成 年 月 日	
授業者名	教科名	参観者名	
1 チェックリストによる授業評価			
【評価:◎十分満足 ○おおむね満足 △努力を要する】			
	重点	評価項目	評価
Ⅱ 授業をつくる	1	追究する価値の高い、本質的な内容につながる課題となるように吟味している。	
	3	◎ 共有や吟味が効果的に行えるよう、学習形態や話し合いの方法等を工夫している。	
	4	子ども自身の言葉で本時のめあてを書かせるようにしている。	
	Ⅲ 授業	2	○ 最終的に引き出したい考えや言葉を具体化し、明確にしている。

#### 授業観察シート(一部)

#### 管理職の声



「職員室などで、授業についての話題が増えたように思います。日々の授業について振り返り、改善するという意識が高まり、一人一人の授業力向上にも結び付いたと思います。」  
 「本校の実態に応じて校内研修システムを改善していったことで、負担感なく計画的に進めることができました。」

## <参考・引用文献>

- 授業改善ハンドブック 新・授業の窓「授業をつくる16の視点」  
(福島県授業改善研究会 2013年)
- 校内研修のてびき【小・中学校版】  
(長崎県教育センター 2013年)
- 授業力を高める校内研修の進め方  
プロジェクトによる研究 《平成22・23年度》 概要版  
(鹿児島県総合教育センター 2011年)
- 教員研修の手引き2015－効果的な運営のための知識・技術－  
(独立行政法人教員研修センター 2015年)
- 福島県教育センター研究紀要第37集, 第38集  
「授業改善の日常化を図る校内研修」  
(福島県教育センター 2008年, 2009年)
- 福島県教育センター研究紀要第44集, 第45集  
「授業力の向上に係る校内研修の在り方」  
(福島県教育センター 2015年, 2016年)



執筆・編集

渡辺 昇

島貫 条司

石綿 厚

鈴木 豊

木戸美智子

宍戸 和博

加藤 彰子

瀧田 和也

表紙・挿絵

星 博人

編集協力者

鈴木 睦治

鈴木 芳夫

味原 正美

中野 茂

高橋 進一

猪俣 雄介

佐藤 新治



授業研究ハンドブック 校内研修改善に向けた4つの提案

印刷・発行 平成28年3月  
発行 福島県教育センター  
(代表者 渡辺 昇)  
〒960-0101 福島市瀬上町字五月田16番地  
☎(024)553-3141

印刷所 株式会社 阿部紙工  
〒960-2195 福島市庄野字柿場1番地11  
☎(024)593-5111

